

主体的に野菜作りに取り組む子どもたち

幼児でも管理しやすいサイズの畑に

鹿児島と言えば、黒毛和牛、黒豚をイメージされるグルメな方も多いと思います。実際、当園にも畜産農家として生計を立てている家族が、1割ほどあります。しかし、新型コロナウイルスの影響で、外食や宴会が少なくなり、大きな打撃を受けています。ぜひ、皆さん、おいしい肉をいろいろな機会に味わってください。

前置きはここまでにして、今回は、「あたしんちの畑」へと走って向かい、作物の管理を楽しむことが日常化した子どもたちの、様々な姿を紹介します。

この畑は、幼児にも管理ができそうな面積にすることがポイントです。旧園舎の畑では、100円ショップで購入したプラスチック製の柵で四角に仕切っていました。新園舎の畑では、フラフープを仕切りに使いました。フラフープを好きな場所に置いて、U字ピンで3箇所ほど打ち込むだけでできるので、オススメです。隣の畑との余裕もあり、世話や管理が、お互いにやりやすくなります。また、年度ごとに、少し場所をずらすことで、土も元気になります。そして、円形の畑は、オシャレな感じもあります。

それでは、「あたしんちの畑」での具体的な事例を伝えます。

コミュニケーションを楽しむ姿

活動が順調に進むようになると、私たちが想定していなかったステキなドラマが見られるようになりました。それは、「コミュニケーションを楽しむ姿」でした。保護者が迎えに来ると、一緒に畑へ向かい、野菜の生育状況を見ながら、笑顔で語り合ったり作業したりする姿が見られます。さらに家族だけでなく、子ども同士、子どもと親、親同士、来園者と子どもたちなど、様々なかかわり合いに発展し、「どうやったら大きく育つかなあ?」「どんなふうに料理をすればいいかなあ?」「次は何を育てますか?」など、畑を囲んで交流を楽しむ機会が増えました。

そして、専業農家の方や家庭菜園を趣味にされている方は、一気に話題の中心になりました。これまで寡黙な印象があった方も、専門の得意な領域での質問に、笑顔で、いろいろなアドバイスをされていまし



畑を前に、子どもたちの会話が弾む

た。もちろん私たち職員も、様々な管理方法を学ぶ機会になっています。

おすそわけ文化の復活

「この野菜、どうぞ」と、自分の畑でたくさん収穫できた野菜を、子ども同士で「おすそわけ」する姿が自然発生的に広がり始めました。

そして、次のようなドラマが展開されました。神戸から大学生グループが保育の見学に来た時のことです。ある男児が、挨拶がわりという感じで、すぐに自分の畑に向かって行きました。そして、大きく育てていた二十日大根をプレゼントしました。この行動は、自分が管理を続けていた畑だからできたよさであって、もし、クラスみんなの畑だったとしたら、ほかの子どもたちから「勝手なことをしないで」と、辛辣な言葉が発せられていたかもしれません。

この大学生は、二十日大根を神戸まで持ち帰り、調理して食べたことを報告してくれました。その報告を聞いた男児は笑顔が広がり、毎回、見学者にプレゼントするようになったことは言うまでもありません。

この「おすそわけ文化」の事例は、わず

か、0.5㎡しかない土地で、枚挙にいとまがないぐらい、くり返されています。

ほうれん草がたくさん収穫できた女の子は、多くの職員に数枚ずつ渡すことを楽しむようになりました。私も、「おすそわけ」してもらい、湯通ししておいしく味わいました。

ミニトマトとピーマンを交換し合う姿。収穫したばかりの枝豆を、たくさんの友だちに分けてあげようと、少しずつ配分している姿。収穫したオクラの種をみんなに分ける姿などなど。

これらの子どもたちの姿は、私が忘れてしまっていた昭和の時代そのものでした。食べきれないほど収穫できた農作物を、いつも笑顔で届けてくれていた近所の方を思い出すことができました。助け合いながら暮らしていた、古きよき時代を思い出させてくれるなど、「あたしんちの畑」で子どもたちが見せる姿は、私や職員が想定していた以上の主体性でした。

さあ、みなさんの施設でも試してみませんか? 次号では、主体的に取り組んでいるからこそ、園児が涙したドラマを紹介します。



「この野菜、どうぞ」
自分の畑をもつことが、
主体的な行動につながった!